

第 63 回北海道社会教育研究大会（オホーツク大会：網走市） 2024/11/01

石狩市における教育プランへの提言づくりへの社会教育委員会議の取り組みの報告（資料）

石狩市社会教育委員の会議 委員長 木村 純

石狩市の社会教育委員の会議は、昨年度から、「地学協働」を主なテーマに学び議論することを中心に活動してきました。子どもたちを育てるためには地域が一体となって取り組み、たんに地域が学校の応援団にとどまるのではなく、学校が変わり、地域が変わるという相互の関係を築くために社会教育がどうあればよいかを考えていくことにしました。昨年度よりはじめた地学協働やコミュニティ・スクールについて学んだことをさらに発展させ、石狩市教育委員会が作成に取り組む「**新教育プラン**」に社会教育委員と社会教育委員会議の意見を提言として反映させることを目標に取り組んできました。「新教育プラン」は現在、市民のパブリック・コメントも受けつつ、作成がされていることですが、社会教育委員の会議として、提言づくりにどう取り組んだか、今まで、社会教育委員の会議で配布された資料をまとめたものです。

資料 1： 石狩市社会教育委員会議についてのメモ

2024 年 6 月 13 日

石狩市社会教委委員の会議 委員長 木村 純

（2024 年度社会教育委員の会議）第 1 回会議を始めるにあたって**社会教育委員の役割についての私の考え**

- ・私は、もう 10 年以上、社会教育委員をつとめています。札幌市の社会教育委員は 10 年で卒業するという取り決めがありますが、卒業した直後に石狩市教育委員会からお電話があり、石狩市の社会教育委員になるよう依頼がありました。お引き受けした理由はいくつかありますが、その 1 つは石狩市の社会教育に魅力を感じていたことがあります。石狩市の社会教育を代表するのは、**i 石狩市民図書館**、**ii いしかり市民カレッジ**です。私がもうひとつ誇りに思うのは、市民と行政との協働の活動として、**iii 子育て支援のネットワーク活動**があります。2005 年に、まちぐるみで子育てを応援しようと、市内の子育て支援団やサークル、行政の担当者たちが立ち上げた組織です。「石狩で子育てして良かった」と思う人が一人でも多くなることを願って、イベントや講座の企画・実施、子育て情報の発信などの活動をしています。主な事業として、**「子育てガイドブック」**の発行を毎年行うことや**「子育てセミナー」**（子育てに関する講演会や親子で楽しめる講座の実施）や**「子育て子育てゼミナール」**（今の子育てについて講師を招くなど、支援者の学習会）、**「そだてっこ」**（子育てに関する知識を学び、体を動かしリフレッシュすることもある、託児付きの講座を行う。親同士の交流の場でもある）を開催しており、保健福祉部子ども政策課に事務局が置かれています。市民の学習を基礎にした協働のまちづくりが行われていることが石狩市のひとつの特徴となっていて「子育てガイドブック」づくりはその象徴だと思います。
- ・委員の会議に参加していただいて、気がついたこと、石狩市の社会教育をこのようにしたいということについて、どんどん発言していただく（**気楽に発言ができる会議**）と同時に社会教育委員としてお一人お一人が活動をしていただくことを期待します（**社会教育について語り合ったことや体験したことで気がついたことを共有できる場**）。
- ・同時に、社会教育委員の大きな役割である社会教育計画づくりについても積極的に参加していただきたい（社会教育法では、社会教育委員の職務のひとつに**社会教育に関する諸計画の立案**

を第 17 条に上げています)。石狩市教育プランに社会教育委員としての見解を反映させることも社会教育委員の大切な役割です。

- ・また、社会教育委員の会議を、石狩市の社会教育や社会教育行政について、それがどのように取り組まれているかを知り、社会教育の大切さを学び（社会教育委員の会議はそのような**気づきと学びの場**）、そして、委員の任期を終えたあとも社会教育および社会教育行政のよき理解者として活動していただくことが何よりも重要なことだと考えています。委員長としてもそういうことを大事に考えて運営をすすめてゆきたいと思います。皆さんの積極的な発言と会議運営へのご参加を期待します。

第 1 回のすすめ方〈この 10 年ほど取り組んできたこと〉

- ・社会教育委員と社会教育委員の役割について、この 10 年ほどの間にどんなことに取り組んできた主なことを下記に示しました。

※ 石狩市の社会教育委員の会議が取組んできた学習（講座やワークショップとして実施）

- ① 2013 年度「社会教育委員と学ぶ講座」
- ② 2014 年度「社会教育委員と学ぶ講座Ⅱ」（2014 年 11 月 5 日 10：30～15：00）
「石狩市のコミュニティを学ぶ～浜益区の取り組みから～」
会 場：浜益コミュニティセンターきらり 参加者 19 人
報告者：地域おこし協力隊 瀧 勝明氏 瀧 税子氏
庄内藩陣屋研究会副会長 佐藤 睦氏 相馬 保氏（社会教育委員）
- ③ 2015 年度～2019 年度には、北海道教育大学による社会教育主事講習の現地実習を受け入れ、石狩市の社会教育の現状と課題について受講者と共に学んできました。
2015 年度 パネルディスカッション「石狩市厚田区の地域づくりと社会教育の課題」（2015 年 8 月 4 日 13：00～15：00 2015 年度社会教育主事講習の一環）
会 場：厚田保健センター
報告者：厚田区地域協議会 会長 佐藤勝彦氏 農業 河合徳秋氏
厚田区 漁業 中井健太氏
地域おこし協力隊 小島拓也氏 沼倉 瞳氏
進 行：石狩市社会教育委員の会議 委員長 木村 純
参加した社会教育委員 委員長を含む 10 名
文部科学省委託 2015 年度社会教育主事講習受講生 29 名
- ④ 2015 年度 ワークショップ『厚田を石狩市の宝にー「石狩市民が知っておきたい〇〇のこと」』（2015 年（平成 27 年）11 月 20 日）
- ⑤ 2016 年度 パネルディスカッション「厚田と浜益の地域づくりと社会教育の課題」（2016 年 8 月 4 日 14：30～16：30 2016 年度社会教育主事講習の一環）
会 場：厚田総合センター
報告者：浜益区農業 寺山広司氏 厚田区漁業 中井健太氏 石狩市社会教育委員 相馬保氏（浜益区）、石狩市社会教育委員 大黒利勝氏（厚田区）、地域おこし協力隊 沼倉 瞳氏
進 行：石狩市社会教育委員の会議委員長 木村 純
参加した石狩市社会教育委員 委員長、報告者を含む 7 名
文部科学省委託平成 28 年度社会教育主事講習受講生 31 名
- ⑥ 2020 年度 コロナ禍における公民館でのサークル調査・報告書の作成

- ⑦ 2022～23年度 地学協働、コミュニティ・スクールについて ヒアリングと学習会の実施（石狩市社会教育委員の出口寿久北海道科学大学教授を講師として）

〈この2年間ですすめたいこと〉

（1）「地学協働」を社会教育の立場からどうすすめるかについて話し合いと学びをすすめます。

- ・なぜ「地学協働」を取り上げるか
 - i 社会教育行政としても重点的な課題となっていること。
 - ii 石狩市の社会教育委員の活動としてもとくに子どもの問題についての取り組みが必ずしも十分でなかったこと。
 - iii 社会教育委員のメンバーにも出口委員のようにコミュニティ・スクールの専門家もおり、学校関係者も積極的に対話・討論に参加をしてくださり、よい取り組みをして、全国的・全道的にも発信が可能であること。
- ・今年度に行いたいこと
 - i 調査 若者を対象とする意識調査（予備調査・本調査、エゾロックとの連携）
 - ii ヒアリング（昨年度からの継続）
 - iii 中間報告（交流と学びの場として開催－日程等第2回社会教育委員の会議で行う）
- ・来年度の予定
 - i 報告書の完成
 - ii 交流と学びの会の主催

（2）教育プランへの提言づくりに取り組みます（1年目前半の課題）

- ・石狩市教育プランについて
 - i 石狩市教育プランとは
 - ii 教育プランづくりに関して社会教育委員に期待されていること
- ・社会教育委員会としての協議とそのまとめ
 - i 第1回社会教育委員の会議（本日）

教育プランに反映させるためにどんな課題が考えられるか、例えば、社会教育として地学協働をどう進めるか、高齢者の社会参加の場と居場所づくりをどう進めるか、大人の学びの場をどう発展させるか（少子高齢化、気候温暖化・SDGs、平和や民主主義をめぐって、いしかり市民カレッジをさらに発展させるためには、若者や子どもをめぐって、市民活動をどう発展させるかなど…）、それらについてどのように協議をすすめてゆくかの話し合いを行います。
 - ii 市民へのヒアリング（第2回の会議までに少なくとも社会教育委員が市民おひとりに意見を聴き、その結果を第2回社会教育委員の会議で紹介する）。
 - iii 委員長が行うヒアリング（NPOへのヒアリング、若者を対象とする予備的な意識調査、老人クラブ、公民館のサークル活動など…）、日程・会場を社会教育委員にも連絡し、同席を可能にする。 ii・iiiについては第2回社会教育委員の会議で報告を行うが、進行の状況を、オンラインを活用して第2回の会議までに適宜報告し、ご意見をうかがう機会をつくる）。
 - iv→ i・ii・iiiを委員長・副委員長＋、事務局でまとめる（8月中にまとめ、各委員にメール等で読んでいただき、意見をいただいたうえで、9月前半までに行われる第2回社会教育委員会にたたき台を提出し、協議にふす）。

（3）第2回社会教育委員の会議について

- ・教育プランに反映する社会教育委員の会議としての提言について②－ivを受けて、協議をします。
- ・「地学協働」について、それまでの取り組みを踏まえて、どのように継続し、今年度中に開催する交流と学びの会の開催予定について話し合います。

※ 参考資料（前回教育プランへの社会教育委員の会議の取り組み）

教育プランへの意見の反映へー

社会教育委員の会議では、このような「地域を知る学び」を踏まえながら、石狩市の教育プランなどに社会教育委員の会議としての意見を反映させています。

2013 年度の「社会教育委員と学ぶ講座」で取り上げられた 5 つのテーマをもとに、「高齢者」「コミュニティ」を第 1 分科会、「子育て」「学校支援」を第 2 分科会としてそれぞれ 2 回の会議で、また「社会教育施設」については社会教育委員の会議全体で検討して、2014 年度に策定する「石狩市教育プラン後期計画」の取組の方向性について、2014 年 6 月に意見の具申を行った。

第 1 分科会では、①地域の高齢化と高齢者の孤立を防ぐ活動、②石狩市のコミュニティの現状について話し合い、前者では、高齢者を見守る地域にすること、介護保険制度や成年後見人制度等の知識を得ることの重要性を踏まえて、i 高齢者の日常生活を支える取組、ii 高齢者の健康に関する取組を提言しています。後者では、どの地域でもコミュニティの弱体化が問題となっており、町内会など身近なところに集うことも少なくなっていることが話題となり、i 高齢者の身近な集いの場を作る取組、ii 若者と石狩をつなげる取組の重要性について提言を行った。

第 2 分科会では、①子育て支援、②地域社会と学校支援について話し合い、①では、地域で家庭を見守り支援をする仕組みが大切であり、子どもの家庭学習の支援や子育てがしやすい環境づくりをより進めることが重要であるとして、i 子どもに対する家庭学習支援の取組、ii 子育てをする人を対象とした学習機会の取組、地域住民の力を借りて地域と学校の協働体制をさらに深めることが必要であり、②については、地域住民と子どもが交流するための教材として、「地域の宝」（地域の中で大切にしたいと思う事や物、人等）を活用することが求められ、地域ぐるみの学校支援における課題解決のために、i 地域と学校の連携をより深める取組、ii 学校支援ボランティア確保に向けた調査の取組、iii 「地域の宝」を用いた取組の重要性について提言した。

第 3 分科会では、社会教育施設が、市民が集う「居場所」のみならず、学んだことを共有し、様々な課題について議論し、学ぶ場をつくることも求められていること、厚田区や浜益区と石狩地区の地域住民が相互に交流できるよう施設を有効に活用すること、そして、交通アクセスの整備も必要なこと、また、子どもたちの学習支援やロビーワークに取り組むことのできる職員及びボランティアの養成も必要であることが議論され、さらに、市民が運営に意見を反映できるようにするには、各施設の協議会の充実や利用者懇談会の開催などが重要であり、社会教育施設がそれぞれの独自の機能を有効に発揮するためには、施設の取組について情報を共有する「連絡会議」や共同による職員の研修などの重要性が指摘されました。それらを踏まえて、i ボランティアを養成する取組、ii 社会教育施設等が情報を共有するための取組を提言しました。

これらの取り組みは、社会教育委員による「地域を知る学び」が、社会教育委員に期待される役割のひとつである社会教育計画づくりにも活かされていることを私たちに教えてくれている。そして、その学びは地域住民の成長だけではなく、協働のパートナーとしての社会教育職員の学びの場でもあることを実感しています。

私たちは、今後は「地域を知る学び」をさらに発展させて、産業の発展やコミュニティづくり、「居場所づくり」に実際につながってゆくような「地域をつくる学び」に結びついていくように一歩踏み出したいと考え、今、「シニアのための社会参加ハンドブック」づくりもこうした考えに基づくものであった。この活動を通して、石狩市の社会教育の課題を皆で考え、学ぼうとしているところです。

資料2 社会教育委員の会議としての教育プランへの提言づくりのためのヒアリングの実施について（社会教育委員に郵送・配布されたもの）

2024 年 7 月 15 日

メモ 石狩市社会教育委員 木村純

暑さの中、お元気でお過ごしでしょうか。

6 月の社会教育委員の会議からあつという間に 1 カ月以上が過ぎてしまいました。次の会議までに、社会教育委員のそれぞれが必ずひとり以上の市民の皆さんにヒアリングをして、その結果について話し合いをしたうえで、社会教育委員としての（教育プランへの社会教育委員の会議としての）意見をまとめましょうという提案をしました。

当然ですが、その提案について「どういうことを聞けばよいのか示してほしい」というご意見をいただきました。どのようにお答えしたらよいかと考えるうちに少し体調を崩して、お答えするのがすっかり遅くなってしまいました。おゆるし下さい。

私は、社会教育にとって大切なことは「対話」を産みだすことだと考えています。それは石狩市の地域づくりをどうすすめるか、少し大げさかもしれませんが、そのために社会教育がどうあべきかに限らず、かつてない「分断」が進み、戦争も地球温暖化も止められない現在の「世界」にとっても必要なことだと考えているのです。

皆さんの周りにはさまざまな方がいらっしゃいます。いつもお話しをするとよく世の中のことを考えられておられて尊敬できる人。この人のアイディアや意見は素晴らしい、こういう考えで地域や世の中を変えていくことができるかもしれない。子どもや高齢者の居場所づくりや子育て支援の市民活動を悩みながらも一生懸命に取り組んでおられ、行政のあり方にもしっかりした意見をお持ちの方。公民館や図書館や博物館などの社会教育施設を積極的に利用し、社会教育行政についてもご意見・ご要望をたくさん持っている方。町内会、老人クラブ、PTA、子ども会育成会など役員を引き受けて、リーダーのなり手や会員拡大や活動のことで悩みを抱えながら、取り組んでいる人、一方、そのような市民参加・市民活動の在り方に批判的な人、仕事を持ちながらもそのような活動に参加者を増やすためのアイディアをいっぱいお持ちの方。また、このような話をしたことはとはないけれど、そういう話をこの人と話したらどんな話になるだろうと思わせる人……。地域づくりや社会教育について一見無関心のように見えても、実際お話をしてみると実によく考えておられ、豊かなアイディアを持っている人、こんな方たちに、公民館や図書館をあまり利用しない理由や石狩市のよいところ、よくないところなどをお聞きしたら、とても素晴らしい意見が聞けたなど、そんな予想外の出会いもできるかもしれない。このような人たちからお話しを聞いて、これからの石狩市の社会教育を考えるヒントにしたいと思うのです。このような多様な方たちに社会教育委員がヒアリングをすることは、必ず、石狩市の社会教育にとって意義のあることだと思います。

さて。まだ「何が何やら」とお考えの方がいらっしゃると思います。私自身は、この間の社会教育委員長全道研修等を通じて、まず「子どもの居場所づくり」（こども食堂、学習支援など）に取り組んでいる方たちを対象に聞き取りをすることにはじめに取り組んでみたいと考えています。まず、その活動をなぜ、どういう方たちと始めたか、始めるにあたってどんな苦労をされたか、そこにはどんな子どもたちが来ているか、その子どもたちを観察してどのようなことを感じているか、行政のどんな支援がありがたかったか、行政だけでなく、これからどのような支援が必要か、もっと一緒に活動してくれる人を増やすためにどうしたらよいと考えているか、などをお聞きしたいと思います（私が聞き取りをした結果は出来るだけ早く皆さんにお知らせしようと考えています）。おひとりにヒアリングしたことを A4 版の用紙 1 枚にまとめたいと思います。最低限必要な共通の情報は、その方の年齢（20 代、30 代、40 代、50 代、60 代、70 代、80 代）、性別、家族構成、住所

(花川、花川以外の旧石狩市、厚田、浜益など)、職業、石狩にお住まいになって何年になるかぐらいだと思います(報告用紙についてはこの文書の末尾にひとつの案をお知らせします。この案にこだわらず、それぞれのやり方で、お一人について A4 版用紙 1 枚にまとめ、それをもとに次の会議に参加していただきたいと思います)。

このように考えると、皆さんにお聞きすることは例えば次のような点ではないでしょうか。1. 石狩市のどんなところが好きで、どんなところがきらいか、あるいは、石狩市で解決すべき一番の課題は何か。もっと磨くべき、あるいはもっとたくさんの人に知ってもらいたい魅力は何か。2. 社会教育施設(公民館・図書館・博物館)をどれくらい利用するか。利用しないか。利用する理由、利用しない理由。3. いしかり市民カレッジに参加したことがあるか。どんな講座に参加したか。どういう内容の講座なら参加したいか。また参加していなければその理由はなぜか。4. 子どもの教育について。この頃の子どもたちについてどう思いますか(のびのび育っていてよい、外で遊ぶことが少なくなり心配だ。スマホが離せなくなっている。ゲームばかりしているなど)。クラブ活動やお稽古ごとのことなどはどうなっているのか、など。5. 石狩市の市民活動の現状(皆さんに身近な町内会、PTA、老人クラブやいろいろな NPO やボランティア活動、またサークなどの趣味や学びの活動の現状をどう考えているか(①リーダーやメンバーは確保されているか。②世代交代はうまくいっているか。③活動経費は十分あるか。④会場は確保できているか。⑤相談に応じてくれる場所・機関・団体などはあるか)などです。

私は、皆さん自身の関心に応じてもっとそれぞれに聞きたいことを聞いてくださることが、そのあとの社会教育委員の会議が楽しくなることと期待しています。

皆さんがこういう人に会って話しをしたいけれどどう話してよいかわからないと言う時は、どうぞ私に連絡をしてください。メールやお電話、あるいは直接お会いしてお話をします。これは私が何でもわかっているからそうするものではありません(当然わからないことばかりだから出来るだけ多くの人にお話しを聞きたいのです)。私とではなく他のどなたかと相談することでご自分が聞きたいこと、聞くべきことがいろいろわかってくることもあるのだと思います。どうぞ社会教育委員同士でそのような相談をし合ってください。あるいは、あなたの友だちとそのような話をしてください。そして、それが、私たちが大切にしなければならない「対話」の始まりで社会教育の入り口だと思うのです。

この文書に述べたようなヒアリングを社会教育委員の皆さんに取り組んでいただき、第2回の社会教育委員の会議でその結果について討議し、その話し合いをもとに原案を作成し、9月13日に社会教育の皆さんに郵送・配布し、意見を求めたうえで作成したものが以下の資料です。試料中の囲みされた部分は、今後の社会教育委員としての議論の継続のために今回付け加えたものです。また他市町村の方にもお読みいただくために若干の加筆もしています。

資料3：石狩市教育プランへの社会教育委員会会議からの提言(2024年9月5日の社会教育委員の会議での議論を踏まえて)

石狩市社会教育委員の会議(木村純)

0. 新石狩市教育プランへの提言にあたって

「新石狩市教育プラン(2025~2029)」(以下「新教育プラン」)の策定作業がすすめられています。社会教育法は第17条で、社会教育に関し教育委員会に助言するために行われる社会教育委員の職務として、最初に、社会教育に関する諸計画を立案することをあげています。

新教育プランも、この「社会教育に関する諸計画」の内容を含んでおり、この策定にあたっては、社会教育委員の会議としての意見や社会教育委員の意見を反映することが大切だと考え、社会教育委員だけで議論するのではなく、今、市民の皆さんが、石狩市の地域と社会教育の現状や将来について、どのように考えているかを中心にヒアリングをしたうえで、その結果も踏まえて、社会教育委員の会議で議論を行ったうえで提言を作ることになりました。

1. 教育プランの根底に置かれるべきこと

(1) 社会教育の重要性が増していることを確認すること

- ・社会教育は、地域の人々が共に学ぶことで、対話を生み出し、支え合いの基礎となるつながりをつくり出すものです。今私たちの社会は、解決することが困難な問題をたくさん抱えています。そして、それらが世界中で分断を惹き起こす契機にもなっています。
- ・ウクライナやガザでは連日のように、子どもや女性たちをはじめたくさんの人が亡くなっています。報道によれば、ガザでは1万人以上の子どもが亡くなり、教師の死者も500人に上っているといえます。世界中の人が「停戦」を1日も早くと願っているのに、私たちは戦争を止めさせることができていません。こうした戦争こそが、環境破壊をさらに進め、CO₂の排出を増やし、地球温暖化を深刻化させています。世界中でグレタ・ツインベルさんやZ世代と呼ばれる若者が地球温暖化の防止を訴えているのにもかかわらず、大人たちはそのことに真摯に向き合っているとはいえない状況が続いており、「史上最大」とか「想定以上」と呼ばれる自然災害の連続にもつながっているのです。
- ・こうした状況から脱するには、どんなに時間がかかろうとも対話を重ね、学び合いながら共同の力で分断・対立を乗り越えていくことが必要です。暉峻淑子埼玉大学名誉教授は「戦争の反対語は平和ではなく対話です」（暉峻淑子『対話する社会へ』岩波新書、2017年）と述べていますが、そうした対話と学び合いこそ社会教育が生み出すことができるものです。
- ・社会教育は、地域住民が、学びの成果を活かし地域づくりに参加することを通じて地域コミュニティの維持に貢献してきました。公民館や図書館、博物館などの社会教育施設がそれぞれの機能を発揮することによって、人々の対話とつながりを生みだして地域の活性化に貢献してきました。また、高齢者、障がい者、外国人、困難を抱える人々など、すべての住民が孤立することなく、地域社会を構成するひとりひとりとして社会参加できるよう社会的包摂に寄与してきました。さらに長寿化により、高齢者がそれぞれの能力を活かして1日でも長く社会参加できるようにすることなど、社会で求められる能力の変化に対応した多様な学習機会を作りだしてきました。
- ・何より、これらは、社会教育委員や公民館運営審議会や図書館・博物館の協議会をはじめとした重層的な住民参加のしくみをもち、様々な、地域住民と行政との協働を生み出すことによって実現することができたのです。今後も、コミュニティスクールや地域学校協働の一体的取組のなかで、学校と地域住民との間の対話・協働が必要となるなかでも、社会教育が地域で豊かに組み込まれていることがその土台となります。例えば、学校の部活動の地域移行などの課題についてもより多くの市民の参画が求められますが、そのためには、社会教育の場で、学び合いと対話が行われることが不可欠です。今まで以上に、社会教育の役割が期待されているのです。

(2) 若者と子どもの声に耳を傾け、若者・子どもが主体的に参加する社会教育

① 若者たちの活動ー浜益地区の動きから学ぶ

- ・石狩市の社会教育、とくに施設の利用者や「いしかり市民カレッジ」の参加者について、ヒアリングでは以下の諸点が指摘されています。第1に、参加する人がごく

一部の市民に限られていることです。第2に、同じ人がいくつもの活動を掛け持ちしていることが目立つということです。第3に、世代交代がうまくいかず、若いメンバーが加わらず高齢化がすすみ、リーダーのなり手がいないためにリーダーが高齢化していることです。これは、社会教育活動だけではなく、市民活動が共通に抱えており、他の市町村とも共通する問題でもあります（だからこそ、若者や子どもの声を聴き、主体的に参加してもらえるようにすることについて、多くの市民と共に取組、一緒に考えることが重要な課題なのです）。

- ・今、浜益地区では、NPO 法人エゾロックの若者たちが活動しています。彼らの活動でよく知られているのは、8月に石狩で行われる北海道最大級の音楽フェスティバルで環境対策活動のボランティアを行っていることです。事務所は札幌市中央区にあります。その活動の一つに、「浜益ベース」の活動があります。
- ・浜益区に一軒家「はまますベース」を借り、宿泊・滞在しながら「快適でサステナブルな田舎暮らし」を考え、浜益の関係人口を創出する活動づくりを行っています。札幌市などから通ってくる学生だけではなく地元の若者もこの活動に参加しています。
- ・彼らの活動として、『集落の教科書』づくりがあります（『集落の教科書 @石狩市浜益区 あなたもきっと好きになる』）。これは、「浜益で『暮らす』」「浜益の『個性』」「浜益での『教育』」「浜益ベース」のこと」など全73頁にのぼるものです。「編集後記」には、次のように書かれています。この取組は「現地の生の情報を大事にするため、実際に浜益に来て、インタビューを実施しました。多い日で1日に4本のインタビューをすることもありました。実施後には、収穫等、浜益の取組のお手伝いをすることもありました。振り返ると、この活動は普段から浜益で活動している『いつものつながり』があったからできた取組だと思います。そして、これからはこの教科書が『浜益に関わる入り口になる』と感じています。この取組に関わった浜益区民や、作成に関わったメンバーの想いにぜひ触れてください！最後に、浜益で待っています」。
- ・他にも、彼らは、浜益の人たちこんなインタビューをしています。「物をもらうときに『いっぱいあるからいらない』といったらそのあと来なくなるから、いっぱいあっても全部受け取る。おすそ分けはすべて受け取って、もらったら必ずお返しをする。おばあちゃんちだったら電球取り換えの手伝い。仕事で忙しければ必ず行く。1回断ったら、飲み会も何もかも、その人からは来なくなるから全部受ける。全部受ければ輪が広がっていく。田舎で一人では仕方ないからね」（40代男性）。「お年寄りが一人で住んでる家が近所にあったら、気にして生活する。回覧板が3日刺さってたらちょっと見に行く。新しく入ってくる人や浜益に関わってくれる人は極力接しようと思っている。話してみても、興味を持ってくれるならそれでいい。急に田舎に来る人に関わっていく人は、地域のためにこういうことをしようって思って、地域貢献しているイメージだし、やはり自分も外から人が来てくれているのに、ないがしろにするのは違うと思っている。若い人が関わってくれるって、年近いうれしくて。変な奴だから関わるのはやめようとはしたくない。意外とそういうのは最近少なくて、みんな大切にしようって思ってるんじゃないかな。個人的にも浜益にとってはありがたいことだっと思うから、大事にすべきだなと思う」（20代男性）。若者たちが『集落の教科書』づくりを通じてたくさんの対話を行い、学んでいることがうかがわれます。
- ・石狩市にはこんな魅力的な若者たちがきつといっぱいいるのです。彼らの声を聴き、彼らの背中をおすことが私たちの役割です。彼らにいろいろな決め事や企画をおこなう場所にどんどん参加してもらいましょう。彼らの意見を地域づくりに反映させましょう。忘れてはいけないのは「浜益」にはこのような若者を育てる力があるということです。それは、石狩市全体に言えることだと思います。私たちが一緒に地域のことを考えることができる若者や子どもたちは他にもたくさんいます。過疎化や高齢化を嘆くのではなく、ここにこそ私たちの希望があります。

※「集落の教科書」とは、田畑昇悟『移住者を助けるガイドブック「集落の教科書」のつくり方』（農文協、2022 年）では以下のように説明しています。移住者を助けるために生まれたガイドブックで、“良いことも、そうでないことも、ちゃんと伝えたい”をコンセプトに、移住者らが地域に関わるために必要なこと・必要そうなことを何でもかんでもできるだけ掲載する。また、集落の変化に応じてそのつど内容を更新し。必要なときに必要な部数を印刷して活用する（『集落の教科書 @石狩市浜益区 あなたもきっと好きになる』はNPO 法人エゾロックのホームページに掲載されています）。

② 学校の部活動を子どもたちに寄り添って考えることも今大切な課題です。

- ・教育プラン(原案)では、「学校だけでは体験できない機会を積極的に設ける」とともに、学校の「部活動の地域移行・地域連携を進めるなど、地域の人的資源を学校運営に取り入れ、学習機会の充実を図ります」としています。学校の部活動の地域移行・地域連携こそ、子どもたちに寄り添う社会教育のなかで学ばれ、対話されるべき重要な課題です。
- ・今、部活動の在り方に関する議論が、コミュニティスクールが地域学校協働との連携のもとで推進されているなかで、そのテーマの1つとなっています。部活動の地域移行について議論が重ねられていますが、みんなが納得できる答えを見つけることが難しいだけでなく、多くの市民にとってはそれはどういう問題なのかさえあまりわからないまま、いつのまにか学校の部活動の縮小が進んでいます。ヒアリングでは、スポーツの指導に当たる学校の先生も、小学生のソフトボールをボランティアで指導する方が70代で、多くの大人がソフトボールは続けていても、指導できる大人は少なく、指導者不足が深刻であり、地域のクラブチームの維持も困難になると心配していること、とくに中高生向けの企画を意図的に取り組む必要について述べています。
- ・「部活動は学校教育の一環だったはずなのに、今は手放して社会教育(社会体育)にしていこうという気に本気になっているかどうか、その覚悟がわからない」「教師が部活動によって多忙に追い込まれ、本来業務が疎かになってしまい、さらにはブラック職種と言われることを回避したいというのが大義名分になってしまっている」のではないかと、という意見もあります（関福生「これからの青少年と大人の関係性を考える『対話』を軸に、受動から能動そして共創へ」『社会教育』No.935、2024 年 5 月号）。
- ・ここで私たちが忘れてはいけないのは、当事者である生徒たちが本当はどう考えているかということです。部活動の当事者は生徒たちであるという大前提に立つならば、私たちが、今、しなければならぬのはまず生徒たちの意見を聴くことです。部活動に対して一番関心があるのは生徒です。自分がやってみたいという種目がなければ校区とは違う学校に行きたいという生徒もいるかもしれません。部活の時間や頻度、指導者の運営方針に疑問をもつ生徒もいるかもしれないのです。それら、生徒たちの本音をきちんと吸い上げて反映させることができれば、これからの部活動のより良い姿が見えてくる可能性が生まれます。また、支援する大人や卒業生たちについても、「毎日指導できる」という人もいれば、「土・日なら」とか、「週1回なら」とか、多様な関わり方が存在します。そういう人たちをうまくコーディネートして、それぞれができる参加の仕方を生み出すことができれば「地域の人材の活用」も大きく進展するかもしれません。
- ・市町村によっては、中学生だけではなく、卒業した高校生や大学生も交え、部活動に関する対話の場を展開し、その意見を反映させようとしているところもあると聞きます。部活動の地域移行に関する対話が「新しい地域社会の結束力を生み出す契機」に発展していくことも可能です。大人だけで決めてしまうのではなく、子どもたちが加わり対話することによって地域の対話や学びに大きな変化が起きるかもしれません。
- ・新教育プラン(原案)では、社会教育のニーズが高まっているのに、担い手・受け手が共に高齢化している一方、若年層ではネットでのつながりが増えているものの、そこでの「つながり」は時に希薄になっていることが指摘され、若年層の参加の仕組みづくりが課題になっていると述

べています。「部活動の地域移行」のような問題について子ども・若者との対話の場を作ることによって、「若年層の参加の仕組みづくり」を一步前進させることができるのではないのでしょうか。

(3) コミュニティの活動にみんなが参加しやすい地域に

- ・地震や水害などの大規模自然災害が頻発し、その度に、地域の「きずな」と「共助」の重要性が指摘されます。それは、必ずしも町内会のようなコミュニティ組織だけがその役割を担うわけではありませんが、地域のつながりをつくる上で町内会をはじめコミュニティ活動が重要です。コミュニティ活動がもっと活発になることと社会教育活動が活性化することは相互に関連しています。しかし、町内会や老人クラブなどの地縁的組織は市街地では組織率が低下し、メンバーの高齢化が進み、リーダーの交代もままならぬ現状があります。
- ・地域の人々が「つながり」、「きずな」を強める取組もたくさんの参加者を得るのはなかなか難しくなっていますが、町内会と地域の NPO が連携し、行政も応援して取り組まれる、市民が集まる行事には、大人たちが参加できるように企業が休日にするような取組を行政として支援することが求められます。最近の町内会にとって困ったことは、「とりわけ若い世代に町内会・自治会が当たり前地域に存在することが、体験的に理解できない人が増えていることである」「小学生の頃に子ども会があったり、お祭りや運動会があって、それらを世話しているのが町内会で、あるのが当たり前で、入るのも当たり前という感覚が共有されていたかもしれない」が「ある年代より下の世代は、生まれ育った地域にもよるが、そのような体験もまったくない人も多い。そうすると、当然『町内会って何』とか、『入らなければならないの』という疑問が浮かんでくる」（玉野和志『町内会－コミュニティからみる日本近代』ちくま新書、2024 年）と述べています。
- ・町内会やコミュニティ活動の今後についてどうするのか、ということを知り、対話の場をつくることも社会教育行政の役割のひとつですが、町内会だけでなく市民活動とも連携・協力して開催されるコミュニティの行事に、子どもも大人も参加することによって、つながりが生まれ、さらに、それらの活動に子ども・若者が主体的に参加することによって成長することも期待されます。

2. ヒアリングで指摘されたことにふれて

(1) 子育てや子育て支援に関わる社会教育の課題

① 乳幼児の子育て環境について

- ・石狩市はとくに乳幼児の子育て環境が整っていると感じている市民が多いのです。これは、自然が豊かで公園が多いこと（地域によるという意見もあった一近い場所に屋根のついたスペースがある公園があることは、子育てにとっても重要だと考える市民が少なくないのです。また市民同士のつながりを強めるうえでも大事な場所です）や交通量が少ないことなどから、比較的安心して子育てができているからです。また、不妊治療の助成が厚いことや、月 1 回の子どもの検診があること、図書館によるブックスタートが行われており、子育てサロンのような親子が集い、交流し、学びあえる場所もある。これらは、若い夫婦が石狩市に住まいを持ち、子育てを始めるという動機にもなっているのです。少子化が進むなかで、どこで住まいを確保し、子育てするかという選択肢が広がっているなかで、石狩市が持つ強みのひとつであり、さらなる充実を進めることが社会教育・生涯学習を発展させることにつながります。
- ・このような子育て環境は、行政の役割はもとより、「子育てガイドブック」の刊行にみられるよ

うに市民活動と行政の協働が生み出したものであり、また、市民の学びの成果でもあります。

② 学童期の子育ての支援

- ・児童館は働く親の強い味方の役割を果たしていますが、夏休みや冬休みには、楽しい催し事など、より様々な体験や学びができる場であることが望まれています。これらは、その企画と実施に子どもたちの参加も得て進められるべきです。また、夏休みや冬休みなどを利用して、支援者やボランティアが配置され、学習支援が行われることも期待されています。
- ・これらは、市民がボランティアとして積極的に参加するとともに、子ども福祉行政と社会教育行政の連携を今迄まで以上に強めることが要請されています。また地域学校協働の取組のなかで、放課後に学校内で「寺子屋事業」や「囲碁教室」等が取り組まれています。このような学校支援に市民がもっと広く関わられるようにすることが大切です。そのためには、中学校や高校のクラブ活動の現状を知るなど、今、子どもたちの学びと育ちに、市民がどのような参加・協力が求められ、また可能かについて考えることも必要です。そのためには、子どもたちの成長、進学に応じた「切れ目のない支援」を石狩市全体でどのようにすすめるかについて、広く多世代の市民に開かれた、対話し学ぶ場を積極的に設けることが求められています。行政が縦割りをこえて、どのような連携が求められ、可能なかを検討するとともに、多くの市民、市民活動組織の参加も得て検討されるべきです。

(2) 公民館・図書館など社会教育施設の役割

- ・石狩市民図書館は、石狩市民にとっては誇りとすべき社会教育施設です。これからの石狩市の社会教育・生涯の発展にとって、間違いなくその「核」としての位置を占めることが期待されています。一方、若者たちをはじめ（これは大人も例外ではなく）「読書離れ」が進んでいると言われています。「若者や子どもを中心に人々の関心はマンガ、アニメ、映画、ゲームなど多様化する視覚文化の方に向かっているのではないか、スマホを介して伝えられる情報で十分だとか、新聞やテレビの時代は終わったとか、そういう様々な見方や議論が氾濫しています。図書館がどういう情報を収集し、アクセスできるようにするべきかだけでなく、そもそも、どういう場所であるべきなのか、ということについてじっくり話し合う時期にきています。
- ・公民館は、移転して、どこにあるか、どういう方法で行くことができるか、どのような事業が行われていて、どのようにしたら参加・利用できるか、をもっと知ってもらうことが求められています。公民館をもっと知ってもらうような機会を、公民館を拠点に活動しているサークルの皆さんと一緒に作りあげる必要があります。
- ・公民館など、社会教育施設への公共交通機関でどのようにアクセスできるかを、市民に周知徹底することと同時に、公共交通機関のアクセスを向上させることが大切です（公共交通機関の整備が不十分であることが石狩市の問題であることは複数の市民が指摘しています。そのなかには、札幌へのアクセスが十分でないと指摘する市民も少なくありませんが、ここでは、まず市内の社会教育施設を含む公共施設へのアクセスの手段としての公共交通の問題で、石狩市民の「つながり」を強めるために解決されるべき課題です。

ヒアリングでは、次のような指摘がありました。かつて、タクシー会社に勤務していた 70 代の男性は次のように述べています。「自分自身もそうだが、若いときは車での移動が可能であったので問題はなかったが、歳を重ね、運転できる年齢にも限界があり、少しずつ近づいている。現職で多くの高齢者に利用を頂いているが、みなさん不便さを感じている。車ありきの昔ながらの街作りをそのまま継承しており、改善されていない。今後の生活含め、移動に関しては不安があ

る。(移動するためにはお金が掛かる。車を運転するにもリスクが高い等。) 石狩市は好きではあり、長く住んでいるが、年齢を重ねることで移動の不便を感じる事が多くなった。今後も改善しそうに感じる事が出来ないのが残念だ。将来のことを考えると札幌などの交通の便が良いところに引っ越すことも考えている。動けるうちは現職にて高齢者含め、移動に苦勞されている方々の役に立ちたいとは思っている」。交通手段や公共交通の問題は市民にとって重要な問題であることがわかります。

これらについて、率直にみんながどのように考えているかを知ることができるような「対話」の機会が望まれます。

- ・施設によっては、駐車場との距離が離れている場所もあるとの指摘があります。また、そもそも公共施設に車がなければ行けないと指摘する市民もいます（モータリゼーションありきの公共施設の配置になっているのではないかと。そういうことは高齢になるほど実感されるようです。公共施設と公共交通手段のアクセスの問題は、社会教育施設の問題にとどまらず、高齢化のさらなる進展によって重要な地域課題のひとつであり、社会教育としても多くの市民とともに対話し、学ぶべき課題になっています。

(3) こども食堂について

- ・石狩市には「こども食堂があったら支援ができるのに」という子どもや保護者が少なくありません。その実態について、石狩市でこども食堂がどれぐらい必要とされているかを考える「開かれた対話の場」が必要です。ここで、こども食堂に関わった経験の共有や対話を行い、こども食堂に関心を持ち、自分ができる協力はしたいと考える市民が参加して議論を行うことは、それを契機として、高齢者をはじめボランティアとして関わりを始める人も少なくないことが予想されます。

ヒアリングから 社会教育委員がヒアリングの対象とした人たちには、こども食堂の運営に関わる人が3名いらした。こども食堂に関わることによって、「今までまったく知らなかった子どもの貧困の実態についてはじめて知った」というかたもおられた。そういうことがきっかけで、指定管理者として運営している、「スポーツ広場に運動靴が用意できなくて参加できない子もいることに気づき、施設の側で運動靴を用意するようにした」という取組も生まれています。

- ・こども食堂は、子どもの「居場所」としても重要であるばかりでなく、石狩市の子どもが置かれている現状が可視化され、多くの市民にその解決の重要性を気づかせる発見と学びの場でもあります(そういう気づきをした「こども食堂関係者」もいることが私たちのヒアリングでもわかりました)。

□ 子育てや子育て支援の活動や社会教育施設についての今後の課題

- ① 子育て支援における市民活動と行政の協働をさらに発展させ、そのために必要な学習の機会を当事者の意見を反映させてつくります。
- ② 学齢期を含む切れ目のない支援をさらにつよめ、子ども福祉行政と社会教育行政の連携・協力を強化する。
- ③ 図書館の今日的役割について、図書館協議会を中心としつつ利用者やその他の関係者に開かれた対話の場をつくる。

- ④ 公民館が誰でも利用しやすくするため、アクセスも含め、広報を強める。同時に、公共交通手段を使つての社会教育施設へのアクセスの方法を整備し、利用の仕方を周知徹底する。
- ⑤ こども食堂が石狩市にどれぐらい必要なのか調査し、必要とする子どもが利用しやすい方法を幅広い関係者の参加によって検討する。

(4) 石狩市の地域課題と社会教育

① いしかり市民カレッジの成果とその課題

- ・石狩市の社会教育（他の市町村ともほぼ共通しています）、とくに施設の利用者や「いしかり市民カレッジ」の参加者やサークルなどリーダーの高齢化が進んでいると感じている市民が少なくありません。
- ・石狩市が誇るべき特徴のひとつは、市民活動がさかんで、様々な分野で行政との協働が行われていることです。しかし、今、市民活動も、高齢化に悩んでいることの他に、活動資金の不足にいつも悩んでいること、活動を進める上で問題にぶつかった時、悩んだ時に、相談に乗ってくれる場がなかなかないことがあります。これは、「いしかり市民カレッジ」も例外ではなく、市民の自主的活動が共通に抱えている問題です。
- ・それを、反対側からみれば、いままで市民活動の相談に乗ってきた関連機関等の「**受援力**」が低下している、ということが指摘されています。「**受援力**」の低下とは、能登半島地震の際、初期のボランティア活動の受け入れ態勢が整っていなかったため、活動を控えることが求められ、その後も過去の大震災に比べて活動者数が増えず、避難所や在宅避難者、小規模な集落への支援など被災者の多様化が進み、きめの細かい支援が必要になっているにもかかわらずボランティアの不足が続いている中で用いられた言葉です。ボランティアの受け入れが後手に回り、結果として被災者に負担がかかっているのは、少子高齢化や過疎化と市町村合併の進行のなかで、支援を求める人と支援をしたい人とを結びつける自治体や社会福祉協議会のマンパワーが減少していることを指して言った言葉です（「能登半島地震初期のボランティア活動の現状と課題」『ウオロ』2024年2・3月号、No.533）。支援を求める人と支援したい人を結びつける力は、行政や社会福祉協議会だけが持っている力ではありません、市民活動やその中間組織も持っている力でもあるのです。NPOやボランティアグループの「受援力」を強めるように働きかけるのも行政の役割です。受援力とは、つながりを作る力であり、支えあいを生み出す力です。とくに社会教育行政はそういう市民活動がつながり、対話、交流し、学びあう場をつくることのできるはずなのです。
- ・「いしかり市民カレッジ」について調査した藤女子大学(石狩市花川に家政学部のキャンパスがあります)の学生は、市民カレッジについて、次のように評価しています。素晴らしいと思う点は、市民たちが自分たちの力で運営し、何年も長い間活動を継続してきていることであり、講座を開催するためには、企画の段階から様々な準備があり、膨大な仕事量が必要であることを学ばせてもらった。社会人がお金を出して仕事のために受講するようなクオリティの高い講座を運営委員やスタッフがボランティアとして15年もの間続けてきていることは貴重である。一方、課題は運営の担い手の高齢化である。地域社会の高齢化がどんどん進んでいくので、市民カレッジのように、市民が気軽に参加して人と人がつながりを感じられる「場」はより価値が高まっていく、と。だからこそ、現在生じている運営スタッフの高齢化の問題を解決して、まだまだ継続していける活動になってほしいと彼女たちも強く思っているのです。
- ・ヒアリングに応じた市民からもスタッフの高齢化への不安が表明されました。世代交代がうまくすすんでおらず、若いメンバーが入ってこない。平日の昼間に開催される活動が多く、現役世代が参加しにくくなっているという意見、またオンラインでの開催も技術的な理由

からか実現していない、という声もありました。若い人が加わってくるようにするには、まず若い人たちが知りたい、学びたいことを若い人たち自身に企画してもらうことです。また、土曜日や日曜日、平日の夜の開催については、そういう企画を考えてくれる人たちにさせてみてはどうでしょうか。せっかく続いてきた活動をさらに発展させるためにはこのような柔軟性をもつことが必要ではないでしょうか。これらの問題についてメンバーだけでなく外部の信頼できる人たちにも加わってもらって議論してみる、という考え方もあります。

- ・教育プランの原案でも「これまでの常識が通じなくなるほど、社会の在り方が劇的に変化しております。このような将来の予測が困難な時代においては、未来に向けて自らが社会の創り手となり、社会課題を解決する力を持つ人材が求められています」と述べられています。平和や民主主義をめぐる問題、地球環境の保護やエネルギー確保の問題、SDGsやLGBT、夫婦別姓など意見が大きく分かれていながら、ほとんど議論が行われていない問題がたくさんあります。世界中で分断が進み、日本でも同様に分断が生まれることが心配されます。上述したような「現代的課題」についても「いしかり市民カレッジ」は講座のテーマとして取り上げ、「対話」の場を積極的に作りだしてきました。これはたいへん貴重なことであり、石狩市民がおおいに自慢としてよいことです。これから、このような「現代的課題」について市民が学び、「対話」する場をたくさんつくりだすことはますます重要です。だからこそ「いしかり市民カレッジ」の学びは貴重であり、多くの市民が関われるようにすることが急がれるのではないのでしょうか。

② 豊かな自然環境・景観・歴史を学び、観光も発展させる

- ・かつて、石狩市社会教育委員の会議は、2015年11月に、「厚田を石狩市の宝に一石狩市民が知っておきたい〇〇のこと」というワークショップを市民と共に取り組んだことがあります。46人の市民が参加し、厚田保健センターの多目的ホールでワークショップを行いました。「自然・風景」、「生活・市民活動」、「産業・資源」、「教育・文化」のグループに分かれて話し合った結果は、私たちの思惑をこえたものでした。
- ・「望来坂からの風景」、「濃昼山道」、「道の駅」、「厚田神社祭り」、「望来豚」、「1年中操業できる厚田の漁業」、「あい風図書館」、「厚田港の朝市」など一つひとつの場所、風景、産物、イベントなどがたくさん提案されるだけでなく、参加した皆さんから報告されたのは、例えば厚田は海の物と山の物と一緒に楽しめるとか、一年中おいしいものがあるというようなことです。つまり、厚田の魅力は、一つ一つのものはもちろんですが、それらを一緒に組み合わせて楽しめる地域であることなのです。一つ一つの宝物が、個別ではなくつながりを持っていて、人に見せたり楽しんでいただけることを、皆さんが自信を持って語られていました。それぞれのグループの話から、とても多くのことを知りました。厚田に来た人たちは、水がおいしいと言ってくれるそうです。豆腐や農作物がおいしいのも水が良いからでしょうか。安瀬（やそすけ）から流れてくる水がおいしいという話や、小学校の運動会や学芸会では、必ず餅まきがあって、子どもたちは餅を入れる袋を忘れないようにと学校から案内されるそうですが、これらもそこで育った人たちの大切な思い出でですし、皆に引き継がれてきた地域の大切な生活文化でもあります。
- ・私たちが知らなかったことも含めて、厚田には多くの人に知ってもらいたい魅力がたくさんありますし、そういう魅力を知ってもらうための色々な課題がワークショップを行うことでわかったのです。今では見られなくなったルーラン海岸を他の人々に見てもらいたいとか、星空や夕陽、月の光などを楽しんでもらうためには、食事をした後泊まる場所も必要であるとか、このようなことをじっくり学習しながら議論する中で、地域づくりを進めていくことが今一番大事なことであり、これは厚田だけではなく、石狩全体で取り組んでいくことが大事であると、あらためて気づかされたのです。石狩市の魅力について、みんなで学ぶこと。そのような学びの

成果を子どもたちに伝える機会を作ること、魅力のある宝物にはかならずそれを守り、人々に知らせようとする地域の人々の努力があること、石狩市の観光は、そういう魅力ある人々との出会いを求めるものであることをもっとたくさんの人々に理解してほしいですし、地域学校協働を通じて子どもたちにも伝えたいことです。

□ 石狩市の地域課題と社会教育の今後の課題

- ① 石狩市の地域づくりにおける市民活動の役割をさらに高めるために行政との協働をさらに発展させ、双方の受援力を高める。市民活動が相互に交流し、お互いの経験を学びあう学習の場を市民活動と行政の協働でつくる。
- ② いしかり市民カレッジについては、メンバーの高齢化がすすんでいることも踏まえて新たなメンバーの参加拡大を支援する。たくさんの市民が自分たちが学びたい講座を自ら企画し実施することをいしかり市民カレッジやそのほかの市民活動、社会行政が支援する。こうした人をいしかり市民カレッジがメンバーとして受け入れられるように支援を行う。そのことにより土日開催や平日夜の学習機会を増やす。
- ③ 国民の間の分断をふせぎ、SDG s や地球環境やエネルギー、平和と民主主義、貧困と格差などの現代的課題についても対話が生まれるような学習の場を市民の参加により企画・実施する。その際、いしかり市民カレッジが今まで担ってきた役割を引き続き発揮できるように支援する。
- ④ 石狩が自然に恵まれ、豊かな歴史を持っていること、そしてそれらを学び、さらに大切にしようとしている市民がいることを道内・道外を含む多くの人に知ってもらう取組を強める。石狩にはたくさん「宝」があり、何よりもその「宝」を引き継ごうと努力している人々がたくさんいることを知ってもらう。石狩を観光することは何よりもそういう人たちに会いに行くことだということを子どもたちをはじめ市民が共通して認識できるような社会教育や地学協働が求められている。
- ⑤ 過疎と高齢化で諦めてしまうのではなく、皆で希望を探しましょう。それはとくに、若者や子どもの存在です。若者や子どもの声に真摯に耳を傾け、事業や施策の企画や実施に参加してもらおう。そのための学習の場も一緒につくり上げることが重要である。

— 社会教育委員の会議では、石狩市民の方々へのヒアリングの結果も踏まえて、以上のような話し合いを行いました。この話し合いのまとめをもって、社会教育委員の会議としての「新教育プラン」への「提言」といたします。

本報告は、丁寧な社会教育委員の会議の議事録を作成してくださるなど、石狩市社会教育職員の皆さんの協力のもとで作成したものです。記して感謝を申し上げます。
社会教育委員の皆さんのご意見や質問には喜んで応じます。以下にメールをくだされば大変うれしいです。

石狩市社会教育委員の会議 木村 純 m.n.k.k@dream.ocn.ne.jp